カント 研究

—「考え方 (die Denkungsart)」

をめぐって—(その1)

北 岡 崇

『純粹理性批判』からの引用は第一版(A)、第二版(B)のページ附による。『実用的見地における人間学』からの引用は、アカデミー版カント全集第七巻により、そのページのみを記す。引用はすべて上の二著作からのものである。

序 文

„die Denkungsart“ (あるいは „die Denkart“) の語は、『純粹理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』、『単なる理性の限界内の宗教』、『実用的見地における人間学』などの、批判期のカントの主要著作において度々用いられている。カントがこの語を用いる際、この語は複雑なニュアンスの意味を有し、この語に対する統一的な訳語を確定するのは甚だ困難なことのようと思われる。カントの上記主要著作の各々についてすでいくつかの邦訳が出版されているが、この語の訳語は「思惟法」、「思考法」、「考え方」、「心術」、「性向」、「意向」など、多様である。各著作の主題に応じて、また同一の著作においても文脈に応じて、色々な訳語を駆使して、カントの思想をより正確に表現しようという訳者の努力がうかがわれる。しかし私は、統一的な訳語として、仮に「考え方」の語を用い、訳語の多様性をではなく原語の同一性を重視してみたいと考える。私は、少なくとも『純粹理性批判』、『実践理性批判』、『単なる理性の限界内の宗教』の三著作においては、„die Denkungsart“ の概念が極めて重要な意味を有しているという点に思い至って以来、認識論・道徳論・美学・宗教論・人間学などの諸領域に及ぶ批判期のカントの全思想の源を探ろうとする研究にとって、„die Denkungsart“ の概念は有力な手がかりになるとの確信を強めている。„die Denkungsart“ の概念は、諸領域において結実した

カントの思索の源が同一であることを推測させる。この源にさかのぼり、この源を明らかにすることを課題とする研究においては、その遡源を絶えず導くはずの „die Denkungsart“ の概念が、多様な訳語にもかかわらず同一の原語であるという点を、決して看過してはならない、と考える。

カントは、『実用的見地における人間学』の第二部「人間学的性格論」において、「感性的存在者あるいは自然的存在者としての人間を区別するしるし」である「自然的性格」と、「自由を賦与された理性的存在者としての人間を区別するしるし」である「道德的[・]性格」とを区別して、後者を「端的に性格あるいは考え方」と言い換え（S. 285.）、更に「考え方としての性格」と言い換える（S. 291.）。このように言い換えられる狭義の「性格」は、「人間が自分自身から造り出す用意をしているところのもの」（S. 285.）、「人間が自分自身から造り出すところのもの」（S. 292.）を示すが故に、自由意志と理性とを有する人間の「考え方の独創性」（S. 293.）をその本質とする。このような狭義の「性格」について、更にカントは、次のように述べる。「性格の確立ということは、一種の生まれ変わりのごときのものであり、人が自分自身に対して為すある厳粛な誓約であり、この生まれ変わりと、この変化が彼のうちに生じた時点とを、新しい時期を画するもののごとく忘れ難くさせるものである……。一教育や実例や教訓は、原則一般におけるかかる確固不変たることを序々に生ぜしめうるものではなく、本能の動揺する状態にうんざりしたところで突然起こる、いわば爆発によってのみ生ぜしめうるものなのである。三十歳以前にかかる革命を試みたものは恐らくわずかにすぎないであろう。そして四十歳以前にこれを確立したものはもっと少ないであろう。一断片的により善き人間になろうとすることは、無駄な試みである。……性格の確立とは、行状一般の内的原理を絶対的に統一することである」（S. 294-295.）。私は、このカントの言葉に注目したい。カントは、「性格の確立」すなわち「考え方の独創性」の発揮という人間学上の問題を一般的に論ずるという体裁のもとで、自らの性格の確立のことを、すなわち、様々な「考え方」の間を遍歴した後、「爆発」、「革命」をとおして独自の「考え方」を創造し、自らの「生まれ変わり」を体験した「時期」

のことを語っているのではないだろうか。カントの生涯にわたる哲学的思索は大きく批判期前と批判期とにわけることができるが、その境界の周辺に位置する二つの主要著作『形而上学の夢によって解明されたる視霊者の夢』及び『可感界と可想界との形式と原理』が、ともにカントが四十歳代の時の著作であるというのも、あながち偶然のこととはいえぬと思える。とりわけこれら二著作のうち後者は、諸領域に及ぶ批判期のカントの思想全体の原型と目されるものであり、私は、この著作を執筆した当時のカントのうちに、「性格の確立」を、独創的な「考え方」の始まりを、「行状一般の内的原理の『絶対的な統一付け』」を推測できると考える。従って、批判期のカントの思索の根源にある独創的な「考え方」を明らかにしようとする際の方法には、豊かな直観—いまだその直観を十分に分節化していないとはいえ—を背景にしている『可感界と可想界との形式と原理』そのものを分析するという方法と、この著作の執筆の後十年以上にも及ぶ思想の熟成期を介して次々と発表せられた諸領域に及ぶ多くの著作の各々における「考え方」の概念を手がかりにして、源にさかのぼるという方法との二つがある。本稿第一章は、遡源の方法による研究の一環として、『純粹理性批判』の「序文 (Vorrede)」に即して、「革命」をとおして創造されるカント自身の「考え方」を、その際廃棄される二種の「考え方」との比較対照のもとに明らかにしようとするものである。

第一章

カントは、数学・自然科学を確立せしめた「考え方の革命」(B. XI, B. XII., B. XIII.) について、更に形而上学を確立せしめるための「考え方の革命」(B. XV-XVI. 参照) について語る際、廃棄されるべき二種の「考え方」と、新たに採用されるべき「考え方」との三種の「考え方」を思い描いている。廃棄されるべき二種の「考え方」とは、一方はライブニッツ＝ヴォルフ哲学にその哲学的表現をみることのできるもので、合理主義的＝独断論的「考え方」と名付けられるべきものであり、他方はヒュームの哲学にその哲学的表現をみることのできるもので、経験主義的＝懐疑論的「考え方」と名付けられるべきもので

ある。何故これらの「考え方」が廃棄されるべきであるのかといえば、いずれも、数学・自然科学・形而上学という理性に基づく諸学の各々においてその学の原理として含まれている先天的総合判断（B. 14-18. 参照）の可能性を基礎付けることができないからである。そして、「革命」を介して新たに採用されるべき第三の「考え方」とはまさしく、この理性の諸学の原理たる先天的総合判断の可能性を基礎付け、それら諸学を確立せしめんとするものである。

私はまず第一節において、数学・自然科学・形而上学という三つの、理性に基づく学の各々に即して、それを確立せしめた、あるいは確立せしめんとする「考え方の革命」についてのカントの叙述を分析したい。

第一節

カントは、数学の確立をある学者によってなされた「考え方の革命」に帰せしめ、その「革命」を次のように叙述している。「彼は、自分がこの図形〔二等辺三角形〕において見たものやあるいはまたその図形の単なる概念を探って、いわばそこからその図形の諸性質を学びとるのではなく、自分が概念に従って自ら先天的に〔その図形のなかに〕考え入れ、（構成によって）描き出したところのものによって〔その図形の諸性質を〕産み出さねばならないということ、…を知った」（B. XII.）。この引用箇所の前半で、カントは、数学にとって不毛な、廃棄されるべき二種の「考え方」について語り、後半で、数学を確立せしめた、従ってまた現に確立している数学の可能性を基礎付けることのできる第三の「考え方」について語っている。「自分がこの図形において見たもの」をいくら寄せ集め探求しようともこのような探究からは、必然性を伴う認識つまり先天的認識（B. 4. 参照）は生じないが、また「その図形の単なる概念」をいくら分析しようとも、この図形についての認識は一向に拡張されえず、従って総合的認識は生じない（A. 6-7., B. 10-11. 参照）。数学者が、例えば二等辺三角形について現にやっているように、先天性と総合性とを合わせもつ認識を次々と獲得してゆくのは、「自分が概念に従って自ら先天的に〔その図形のなかに〕考え入れ、（構成によって）描き出したところのもの」によってこの概念

カント研究—「考え方 (die Denkungsart)」をめぐる—(その1)

の対象である図形の諸性質を認識する場合である、とカントは考える。この第三の「考え方」によってはじめて、真に対象をもつ認識が産み出されるというわけである。

カントは、また、自然科学の確立をヴェルラムのベーコンやガリレオ、トリチェリ、シュタールらによって成し遂げられた「考え方の革命」に帰せしめ、その「革命」を次のように叙述している。「彼らは、理性は理性自らが自分の計画に従って産み出すものだけを洞察するということ、理性は恒常不変の法則に従う自分の判断の諸原理をたずさえて先導し、自分の質問に答えるよう自然を強制しなければならないのであって、もっぱら自然によっていわば歩み紐をつけられて歩まされるようなことがあってはならないということを理解した。さもないと、あらかじめ立てられたいかなる計画にも従わずになされた偶然的な諸観察が、一つの必然的法則においてまとまりうるということはないのに、このような法則をこそ、理性は求め必要とするからである」(B. XIII.)。「かくして物理学ですらもその考え方のかくも有益な革命をひとえにあの着想に負っているのであるが、その着想とは、理性が自然から学ばなければならず、そしてまた理性が自分だけではそれについて何も知りえないであろうようなものを、理性が自ら自然のうちに置き入れるものに従って、自然のうちに求める(捏造して自然になすりつけるのではなく)という着想である」(B. XIII-XIV.)。これらの引用箇所においてもやはりカントは、三種の「考え方」について語っている。自然が理性を先導すると考えると、なるほどこれでも多様な観察が寄せ集められるということは考えられるのであるが、その多様な観察を生かしつつそれを総合的に統一する必然的自然法則なるものの存在が全く理解できなくなる。しかし、だからといってただ理性が自然に先行しさえすればよいというわけのものではない。理性が自然に先行しさえすればよいという「考え方」は、無矛盾性の原理のみにのっとりもともと自然のうちにありもしないものでも、これを捏造して、それを自然になすりつけさえすれば、それで必然的法則が発見されたと独断する「考え方」である。この「考え方」によって、理性のみに由来する先天的な諸概念を無矛盾的にいくら上手に結合しようとも、それだけ

では決して必然的自然法則は発見されえない。これら二種の「考え方」は現実の自然科学とは無関係であり、これらの「考え方」では現実の自然科学の可能性は基礎付けられえない、とカントは考える。カントは、理性が自然に先行するにしても、それは理性が「自らの計画」、「恒常不変の法則に従う自分の判断の諸原理」をたずさえて自然を先導するというかたちにおいてである、という「考え方」を採用する。もちろんここにいう「自らの計画」、「恒常不変の法則に従う自分の判断の諸原理」とは、無矛盾性の原理のみにのっとった「計画」でもなく、無矛盾性の「原理」に尽きるものでもなく、先天的総合認識の「諸原理」のことであり、この「諸原理」に基づく「計画」のことである。この第三の「考え方」によってはじめて、対象に引きまわされることもなく、かといって対象から遊離したり「対象」を捏造したりすることもなく、真に対象をもつ認識が産み出されることになる。

カントは、形而上学の確立をめざす「考え方の革命」を叙述する場合も、三種の「考え方」について語っている。この点を明らかにするため、次の二箇所を引用しよう。前者は従来の「形而上学」の有様を、後者は「革命」そのものを叙述したものである。「従って、[形而上学の手続きが今まで単なる暗中摸索であったということ、また最も困ったことには、単なる概念のあいだでの暗中摸索であったということには、疑問の余地がない](B. XV.)。「今までは、我々の認識はすべて対象に従わなければならないと想定されていた。しかし、我々の認識がそれによって拡張されるような何ものかを、概念によって先天的に対象に関して作り出そうとするあらゆる試みは、かかる前提のもとでは失敗に帰した。そこで今度は、対象が我々の認識に従わなければならないと想定すれば、我々は形而上学の課題においてもっとよくはかどるのではないかどうか試みてみよう。この想定はそれだけですでに、対象の先天的認識の可能性という形而上学の渴望にずっとよく一致する。すなわち対象の先天的認識とは、対象が我々に与えられる以前に、対象に関して何ものかを確定すべきものなのである」(B. XVI.)。これらの引用箇所のうち前者において、カントは合理主義的＝独断論的「考え方」によって形而上学を確立せしめようとする企図を、「単なる概

念のあいだでの暗中模索」にすぎぬと批判している。無矛盾性をめどとした、諸概念相互の整合的な秩序をつくりあげるだけなら、この「考え方」に従えばそれで事は足りる。しかし、整合的に秩序付けられた諸概念がはたして対象をもつのかどうかと問われたなら、この「考え方」に従う哲学者達は、何ら確実な根拠もなしに〈対象をもつ〉と独断することができるだけである。それ故合理主義的＝独断論的「考え方」に従う哲学者達の歩みは、「単なる概念のあいだでの暗中模索」である。後者の引用箇所において、カントは、経験主義的＝懐疑論的「考え方」を批判しつつ、第三の自分自身の「考え方」を提示している。一方は廃棄され、他方は採用されるという相違があるにもかかわらず、これら二種の「考え方」は、これらを合理主義的＝独断論的「考え方」とわかつ、共通の特徴を有する。それは、認識とは対象の認識であるという点を自覚しているということである。対象を問題にすることなく認識を問題にすることはできない。経験主義的＝懐疑論的「考え方」とカント自身の「考え方」とは、この点の自覚を共有するが、対象と認識との関係をどのように考えるのかという点において真っ向から対立する。経験主義的＝懐疑論的「考え方」は、我々の認識はすべて対象に従わなければならないとするが、この「考え方」のもとでは、「我々の認識がそれによって拡張されるような何ものかを、概念によって先天的に対象に関して作り出そうとするあらゆる試み」、つまり先天的総合判断を産み出そうとするあらゆる試みは失敗に帰す、とカントは考える。「対象の先天的認識の可能性」、つまり先天的総合判断の可能性にこそ形而上学の存立がかかっていると考えるカントは、経験主義的＝懐疑論的「考え方」を廃棄して、そのかわりに、「対象が我々の認識に従わなければならない」とする「考え方」を採用しようとする。この第三の、カント自身の「考え方」は、対象を度外視したり対象を捏造したりすることもなく、かといって対象に引きまわされることもない、真に対象をもつ認識を産み出そうとするものである。

以上、数学・自然科学・形而上学という三つの、理性に基づく学の各々に即して、それを確立せしめた、あるいは確立せしめんとする「考え方」の革命にまつわる三種の「考え方」をそれぞれ明らかにしてきた。私は次の第二節にお

いて、特に形而上学の確立をめざす企図をめぐる三種の「考え方」についてのカントの叙述に即して、これらの「考え方」の相互の間にある弁証法ともいうべきものを解明しつつ、カント自身の「考え方」の一層明確な位置付けを行ないたい。

第二節

カントは、クリスチアーン・ヴォルフの哲学を特徴付ける合理主義的＝独断論的「考え方」に対する自分の態度を次のように語る。「批判が反対しているのは、学としての純粹認識における理性の独断的な手続きではなく（何故なら、学はいつも独断的でなければならず、確実な先天的諸原理から厳密に証明するものでなければならぬから）、独断論である。すなわち、概念（哲学的な）からの純粹認識だけでもって、理性が久しく用いているままの諸原理に従いつつ、しかも理性がそうした認識に達した仕方や権利を問はずねることなしに、成果を収めようとする不遜である。従って、独断論とは、理性自身の能力をまえて批判することのない、純粹理性の独断的な手続きのことである」（B. XXXV.）。合理主義的＝独断論的「考え方」に対するカントの態度は、その「独断的な手続き」に対する積極的評価と、その「不遜」に対する非難とに分析される。「確実な先天的諸原理から厳密に証明してゆく」という「独断的な手続き」はまた、「諸原理の合法的な確立、諸概念の判然たる規定、証明の検討ずみの厳密さ、推論における大胆な飛躍の防止」（B. XXXVI.）を命ずる。このような「独断的な手続き」を順守したヴォルフを、カントは、「今日にいたるもなお消えやらぬドイツにおける徹底性の精神の創始者」（同上）と賞讃する。他面、カントは、合理主義的＝独断論的「考え方」をその「不遜」の故に非難する。「不遜」とは、「理性自身の能力をまえて批判することなく」、理性の原理による事物の認識の可能性の基礎付け・その認識の仕方の説明を行なうことなく、従って、理性の原理が確実な認識の原理であると自称する権利を有するのはいかなる限界のうちにおいてであるのか全く無自覚のまま、理性の原理に盲目的信頼を寄せて、形而上学を確立せしめようとする態度のことである。

ところで、合理主義的＝独断論的「考え方」のうちにこの「不遜」が存する限り、認識の「確実な先天的諸原理」である理性の原理がその確実さを自称する権利を有するのはどのような限界のうちでなのか規定されないのであるから、この「考え方」のもとでは、「確実な先天的諸原理から厳密に証明してゆく」という「独断的な手続き」や、この手続きを順守する「徹底性の精神」は、その本領を発揮することができないのである。ところが、合理主義的＝独断論的「考え方」に拠る哲学者達は、この点を看過している。それどころか彼らは、とりわけ形而上学の確立をめざす企図において、理性の原理を盲信し、その原理の確実さにかなる限界も認めぬという「不遜」を大いに発揮して、この「不遜」に「独断的な手続き」と「徹底性の精神」を従属せしめる。まとめれば、合理主義的＝独断論的「考え方」とは、自分が認識の原理として用いている理性の原理に対して盲目的信頼を寄せ、更にこの盲信に無自覚であり、その結果、学一般の手続きとして賞讃に値する「独断的な手続き」や、「徹底性の精神」を全く空虚な形式主義へと墮落させるものである。この「考え方」の域内では、哲学者は、「独断的な手続き」を順守すればするほど、「徹底性の精神」を発揮すればするほど、空理空論に深くはまり込んでゆく。カントが、この「考え方」を廃棄して、理性による理性能力自身の批判としての〈純粹理性批判〉を企てようとする時、彼は上述の悪循環を絶ち、この循環のうちから「独断的な手続き」・「徹底性の精神」を解き放ち、これらが真に働く新たな領野を切り開こうと意図しているのである。

この意図をもつカントにとって、合理主義的＝独断論的「考え方」のいわば対極にある経験主義的＝懐疑論的「考え方」は、一面極めて啓発的である。「人はしばしば、現代の考え方の浅薄さと徹底的な学の衰退とに関する嘆きを耳にする。……別の種類の認識〔形而上学〕においても、まずもってその諸原理の修正に配慮しさえすれば、まさしく同一の精神〔徹底性の精神〕が有効であると証明されるであろう。この修正がなされない限りは、無関心と懐疑と、そして最後に厳密な批判のほうが、むしろ一つの徹底的な考え方を証明するものである」(A. XI. 註)。形而上学の諸原理がいまだ確立せしめられていないのに、

合理主義的＝独断論的「考え方」をとる哲学者が自らの原理に盲目的信頼を寄せる様をみて、経験主義的＝懐疑論的「考え方」をとる哲学者は「無関心と懐疑」の態度をとる。この「無関心と懐疑」の態度が時代の人々の間に拡がっている〈現代〉、他方からは、「現代の考え方の浅薄さと徹底的な学の衰退とに関する嘆き」がカントの耳に入ってくる。ある程度この「嘆き」はカント自身のものでさえある。しかしカントは、「無関心と懐疑」を「無思慮の結果ではなく、現代の成熟した判断力の結果」(A. XI.) とみなし、更にいったんは「無関心と懐疑」のうちに「一つの徹底的な考え方の証明」をみる。空虚な形式主義へと墮落した「独断的手続き」や「徹底性の精神」は問題とするに足りぬとする点で、経験主義的＝懐疑論的「考え方」は、浅薄な「考え方」であるどころか、合理主義的＝独断論的「考え方」より一層徹底的な「考え方」であるとカントは考える。つまり、「独断的な手続き」が、「確実な先天的諸原理から厳密に証明してゆく」ことであり、この手続きを順守することが、「徹底性の精神」であるのなら、いまだ確実な原理が確立されていない形而上学の領野に属する数々の問題については、あれこれ独断的言辞を弄することによりもむしろ「無関心と懐疑」の態度をとることに、「独断的な手続き」と「徹底性の精神」を尊重しようとする態度がうかがわれるというのである。しかしながら、結局カントは、この経験主義的＝懐疑論的「考え方」をも廃棄されるべきであると考える。この「考え方」は、自らの「懐疑」に飲み込まれて自己矛盾のうちに消滅するか、あるいは、自分自身の存立を実証しようとして合理主義的＝独断論的「考え方」の拠って立つある種の原理をあくまでも攻撃することにより、かえって自らその反対の原理をたてることになり、その結果、自ら一種の合理主義的＝独断論的「考え方」へと変容してしまうか、いずれかの道を歩まざるをえない、という形式をいわば宿命として担っている。合理主義的＝独断論的「考え方」をとる哲学者が、この形式に目をつけ、空虚な形式主義としてであれ徹底性の精神を発揮すれば、経験主義的＝懐疑論的「考え方」はもはや存立しえなくなる。かくして、いったんは、経験主義的＝懐疑論的「考え方」に基づく「無関心と懐疑」の態度のうちに、「一つの徹底的な考え方の証明」や、「独断

的な手続き」と「徹底性の精神」に対する尊重をみたカントも、この「考え方」が空虚な形式主義によってすら容易にその存立を脅かされる有様をみて、この「考え方」をも廃棄し、むしろそれらを「厳密な批判」のうちにもみる第三の「考え方」によって形而上学を確立せしめんと企てるのである。このパラグラフのはじめに引用した箇所の最後の文章が、「この修正〔形而上学の諸原理の修正〕がなされない限りは、無関心と懐疑と、そして最後に厳密な批判〔傍点筆者〕のほうが、むしろ一つの徹底的な考え方を証明するものである」となっているゆえんである。

カントは、経験主義的＝懐疑論的「考え方」を否定的媒介とすることによって獲得した「厳密な批判」という第三の「考え方」に立って、廃棄される二種の「考え方」の各々について、また自らの「考え方」について、次のように語る。「批判が反対しているのは、理性の独断的な手続きではなく、……独断論である、すなわち……不遜である。……独断論とは、理性自身の能力をまえもって批判することのない、純粹理性の独断的な手続きのことである。従って、この反対は、……饒舌をふるう浅薄さを弁護するものでもなければ、いわんや全形而上学をあっさり片づけてしまう懐疑論を弁護するものでもない。むしろ、批判は、学としての徹底的な形而上学の成立を促進するために不可避の、あらかじめなされる用意であり、この形而上学は、必然的に独断的に、また最も厳密な要求に従って体系的に、それ故学術的に（通俗的ではなく）遂行されなければならない」(B. XXXV-XXXVI.)。

形而上学の確立をめざす企図をめぐる三種の「考え方」は、カント自身によって以上のように位置付けられる。

第三節

第一節・第二節での分析をふまえて、私は最後に、認識の総合性の根拠としての対象というものに焦点をあてて、三種の「考え方」の各々と先天的総合判断との関係を論じようと思う。

先天的総合判断とは、文字通り、先天性と総合性を合わせもつ判断のことで

ある。まず総合性について説明すれば、総合性をもつ判断とは、主語概念に対して、この主語概念をいかに分析しようともひき出すことのできない、主語概念とは全く異なる述語概念を、結合することによって、認識を拡張せしめるものであって、「拡張判断」とも称される（A. 6-7., B. 10-11.）。この際、主語概念と述語概念との総合の場を提供しつつ、自らこの総合の根拠となるものは対象である。ところで、対象による、対象を場とする総合をとおしてつくられた総合的判断が、更にまた先天性をも合わせもつなら、それは先天的総合判断と称せられるべきものである。なお、先天的総合判断を、対象の必然的認識と言ひ換えることもできよう。何故なら、対象の認識とは総合的認識のことであり、必然的認識とは先天的認識のことである（B. 4.）から。

合理主義的＝独断論的「考え方」は、理性の原理を用いているが、その原理による事物の認識の可能性の基礎付け・その認識の仕方の説明を行なわない。理性の原理が確実な認識の原理であると自称する権利を有するのはいかなる限界のうちにおいてであるのか全く無自覚のまま、理性の原理は形而上学を含むあらゆる種類の認識の「確実な先天的諸原理」であると独断し、こうした独断をとおしていったん「確実な先天的諸原理」なるものを確保すると、後は、「確実な先天的諸原理から厳密に証明してゆく」という「独断的な手続き」を自らの独断に従属せしめつつ、事を進めようとするのである。認識が総合性をもつかどうか、あるいは同じことであるが、概念が対象をもつかどうか、などという問題は、あらゆる事物の認識における理性の原理の有効性に盲目的信頼を寄せるこの「考え方」の関心外にある。この「考え方」の唯一の関心は、自分ではすでに確保していると思ひ込んでいる理性の原理、「確実な先天的諸原理」に由来する諸々の先天的概念を、無矛盾性の原理のみにのっとり、相互に整合的に秩序付けるということ、すなわち「確実な先天的諸原理から厳密に証明してゆく」ということにある。このように、無矛盾的・整合的に秩序付けられた諸々の先天的概念は、理性の原理、「確実な先天的諸原理」に由来するものである以上、対象を有するに違いない、というのが、この「考え方」の盲目的に確信するところであり、いわば信仰であり、またカントによれば「不遜」である。

カント研究—「考え方 (die Denkungsart)」をめぐる—(その1)

それが盲信であれ、信仰であれ、「不遜」であれ、この「考え方」は、理性の原理に由来する 先天的概念はその由来の故に必ず対象をもつ、と考えるのであるから、自分が獲得してきた認識はすべて対象の必然的認識であると、つまりカントの言葉で言えば、先天的総合判断であると、称するであろう。従ってまたこの「考え方」は、カントのように先天的総合判断の可能性を今更改めて基礎付ける必要など感じることもなく、従来通り、理性の原理に由来する先天的な諸概念の無矛盾的な結合に専念すれば、それで対象の必然的認識は次々と獲得されてゆき、我々の認識も次第に拡張されてゆき、諸学の進歩を促進することになるのだと思いついて入っているのである。先天的な諸概念が無矛盾的に結合される限り、この結合によって生じる判断は、確かに先天性を、従って必然性を有する。この点はカントも認める。例えば、すでに「存在」という先天的概念を自らのうちに含みもつ「神」という先天的概念を考えた上で、これら二つの先天的概念を、無矛盾性の原理のみにのっとり「神は存在する」という判断へと結合すれば、その判断は先天性を、従って必然性を有するということは、自明である。先天的な主語概念を分析すれば、必ず先天的な述語概念がひき出されるからである。しかし、カントによれば、このような先天的諸概念の無矛盾的結合によって生じる判断は、「分析的判断」(A. 7., B10.)であるにすぎず、この判断の有する先天性・必然性は、先天的総合判断の有する先天性・必然性とは異なり、対象認識の先天性・必然性を意味しない。合理主義的＝独断論的「考え方」は、元来、対象の必然的認識に基づくものであるところの学を確立せしめる「考え方」ではない。この「考え方」は、すでに確立されている学における諸々の認識を秩序付けること、各々の認識を概念分析をとおして説明すること、にその本領を発揮するものである。

理性の原理を盲信する合理主義的＝独断論的「考え方」によってはすでに解決済みであるとしか意識されず、従って決して本当には解決されなかった、認識の総合性の問題、概念の対象の問題、認識の拡張と学の進歩の問題が、経験主義的＝懐疑論的「考え方」において、そしてまたカントの「考え方」において、問題として自覚される。

経験主義的＝懷疑論的「考え方」も、カントの「考え方」も、ともに、主語概念と述語概念との総合の根拠となるのは対象であるとする。しかし、その際、これらの「考え方」は、互いに全く異なる対象を考えているのである。経験主義的＝懷疑論的「考え方」によれば、総合的判断の総合の根拠となる対象は、理性からは独立しているが、理性を従属せしめ、理性を先導するものである。理性は、対象からの働きかけを受けとる受容器のごときもので、対象が自らを理性へと臨在せしめる様々な局面を次々と拾い集め寄せ集めることによって、対象の認識を獲得する。このようにして獲得された認識は、一つ残らず対象にかかわるものであり、従って総合性を有する。更にまた、理性を先導してゆく対象は全体としては唯一の必然的法則のもとに存在し、その法則の全貌はいつか我々に告知されるであろう、という終末論を、もしこの「考え方」に拠る哲学者がもっているとすれば、彼は、現に理性が有しているような、寄せ集められた、対象の様々な局面の知識ですら、それが対象の局面の知識であるということによって、つまりその知識が対象に由来するということによって、総合性のみならず、ある種の必然性つまり先天性をも有する、先天的総合判断である、と主張するかもしれない。もちろんそれは、理性の根拠に基づく主張ではなく、信仰に基づく独断的主張であって、この主張をなせば、この「考え方」は自ら一種の独断論へと変容してしまうのであるが。しかし、カントによれば、経験主義的＝懷疑論的「考え方」を徹底した哲学者であるディヴィッド・ヒュームにこのような独断的主張はなく、ヒュームは先天的総合判断の可能性の基礎付けは不可能であるとまで考えているのである。つまり、因果律は、自然科学の原理である先天的総合判断を成り立たせている当のものであって、因果律の先天性・必然性に疑いをさしはさむ余地はないのに、ヒュームは、この先天性・必然性を「結局は誤って客観的とみなされる主観的必然性、すなわち習慣性」(B. 127.) に帰せしめる、とカントは語る。ヒュームは、原因の概念あるいは原因の概念の対象をいかに分析しようとも、そこから結果の概念あるいは結果の概念の対象がひき出されることはないと考え、因果の関係を総合的關係であると洞察したが、同時に、因果の関係を、総合的であるが故に、客観的必

然性・先天性を有さぬものと考えたのである。経験主義的＝懐疑論的「考え方」は、概念の対象に注目することによって、それなりのやり方で対象の認識つまり総合的認識の可能性、認識の拡張の可能性を解明したが、この解明は同時に、このような認識は必然性・先天性を有さぬという主張を伴った。これは、この「考え方」が、総合の根拠としての対象を、理性に先行し理性を先導するものと考えたことからの不可避的な結果である。このような「考え方」によって基礎付けられる判断は、総合的判断ではあるが、この判断の有する総合性は、先天的総合判断の有する総合性とは異なり、認識の必然性・先天性の切り捨ての上に成り立つ総合性でしかない。従って厳密に言えば、この「考え方」によっては、学は確立せしめられず、確実な進歩のうちにおかれることもない。

合理主義的＝独断論的「考え方」は、自ら先天的総合判断を産み出しつつあると思いつきながら、実は先天的分析判断をつくっていたにすぎない。経験主義的＝懐疑論的「考え方」は、経験的総合判断の可能性のみを解明する。これら二種の「考え方」は、互いに相反するように見えるが、ともに認識における先天性と総合性との両立の可能性を基礎付けることができないという点においては一致している。

カントは、第三の「考え方」によって、先天性と総合性とを合わせもつ認識の可能性を基礎付けようとする。その基礎付けがどのような方向においてなされるのかは、カントが、認識の総合性の根拠である、認識の対象というものをどのように考えているかを明らかにすれば、おおよその見当がつく。カントが認識の総合性の根拠と考える対象は、理性に先行し理性を先導するものではなく、逆に、自分を理性が先導することを許し、自ら理性に従うものであり、更に言えば、理性による先天的な産出物である。この点において、カントの「考え方」と経験主義的＝懐疑論的「考え方」とは決定的にわかれる。合理主義的＝独断論的「考え方」に拠って、先天的諸概念相互間の無矛盾的秩序付けに全精力を傾ける哲学者も、やはり理性の原理のみに由来する先天的な構築物をつくりあげる。しかし、この構築物は、カントが、認識の対象は理性による先天

的な産出物であると考えられる際の、理性による先天的な産出物とは異なる。その根本的な相違は、後者には、時間・空間の規定が加わっているという点である。時間・空間の規定とは、受容性として働く理性による規定のことである。かくして、カントによる先天的総合判断の可能性の基礎付けは、その総合性の根拠である対象がそれ自身、先天的認識能力である理性による先天的な産出物であるという意味付けを得ることによってなされることになる。理性は、認識の総合性の根拠である、認識の対象を自ら産み出しつつ、先天的総合判断を獲得する。カントは『純粹理性批判』において、理性はいかにして対象を産出するのか、またそのようにして産出される対象とはどのようなものであるのか明らかにしようとする。

本章の課題は、『純粹理性批判』の「序文」を分析して、カントの考え方を他の二種の「考え方」との比較対照をとおして明らかにすることなので、ここでは、カントによる先天的総合判断の可能性の基礎付けについては詳論しない。認識の総合性の根拠としての対象を、カントがどのようなものとして考えているのかにふれ、先天的総合判断の可能性の基礎付けがどのような方向においてなされるのかを示唆するにとどめておく。

(筆者の住所：立川市栄町2-53-2)